

森伸生『サウディアラビア——二聖都の守護者』（イスラームを知る 19）山川出版社 2014年
128頁

サウジアラビア王国は、その国家基本法において「コーランとスンナが憲法」と定められているように、イスラームを国家理念と法体系の基礎とし、イスラーム裁判所が設置されているなど、法と国家機構において強いイスラーム色を持つイスラーム国家である。筆者は、長らくイスラームとサウジアラビアの研究に従事しており、サウジアラビアに滞在した経験もある。筆者が「イスラームを知る」シリーズで、イスラーム国家であるサウジアラビアについて書かれた本書を担当するのは適任であるといえよう。

本書を理解するポイントは、副タイトルとして記されている「二聖都の守護者」にある。二聖都とはイスラームの聖地メッカ、メディナのことであり、二聖都の守護者とはサウジアラビアの国王のことである。サウジアラビアの国王が持つその称号は、国王はイスラームを守る立場にあることを示している。そのサウジアラビアの代々の国王がイスラームとどのように向き合ってきたかということが、本書を流れる主要なテーマとなっている。

サウジアラビアはワッハーブ派を中心とした国である。一方で、国王の立場はワッハーブ派の守護職ではなく二聖都の守護職であり、そのことは、国王はワッハーブ派を重視しつつも広くイスラーム全体にも目配りしなければならない立場にあることを示している。また、筆者も記しているように、サウジアラビアの国名は、サウジアラビアはサウード家のアラビア王国であることを示しており、国王はサウード家が治める王国の長として国を統治しているのである。国王・王家とイスラーム、そしてワッハーブ派との関係には難しいものがあるが、本書はそのことに正面から取り組んだ一冊である。

筆者が本書で対象とする時代は、第三次サウード朝(1932年にサウジアラビア王国となる)、つまり現王朝の時代である。筆者は本書の中で、この第三次サウード朝(サウジアラビア王国)の時代を4つの時期に区分する。筆者はその時期区分について、次のように説明している(3ページ)。第1期は、アブドルアジーズ国王によるイスラーム国家領土の形成期であり、その時の最大の危機は自ら創出した軍団の反乱であった。第2期は、ファイサル国王によって断行されたウラマーの官僚化の時代であり、近代化形成の時期であり、ハーリド国王の時代に継承された。その時代の危機はマッカのハラーム・モスク襲撃事件であった。近代化を進めるイスラーム統治の苦悩の時代である。第3期は、ファハド国王によるイスラーム統治体制の明文化の時代であり、それは外部からの危機、湾岸戦争を契機としてもたらされた。民衆からの保守・革新の主張が盛んになり、国内混乱の時期でもあった。第4期は、2011年に起きた9.11同時多発テロ以降の時代で、9.11事件の影響を乗り越えて安定に入った時期である。アブドラー国王によって斬新な改革が進められ、改革を支えるイスラーム法解釈の時期に入ったともいえる。以上が、筆者による4つの時期区分と各時期が持つ特徴についての説明である。

既存の研究書を見ると、それらのなかでは第三次サウード朝・現王朝の時代について、それがさらに細かい時期に区分されていることがあるが、その区分の仕方は定まっておらず、研究者によってそれぞれに異なる区分が行われている。筆者による4つの時代区分は、筆者が国王・王家とイスラーム・ワッハーブ派との関係、とりわけ国王とワッハーブ派との関係の変化に着目し、それを切り口として本書をまとめていることを考えると、その時期区分は妥当なものであるといえよう。

本書の記載内容についてみていくと、第1期は、領土形成期で、ワッハーブ派の協力を得て領土を拡大しサウジアラビアの建国に成功するものの、当時の軍事力の中心となっていたイフワーン軍の反抗・反乱に悩まされた時期でもある。結局、アブドルアジーズはイフワーン軍を鎮圧し、そのことを経てサウード家の統治を確立したのであった。サウジアラビア王国はワッハーブ派との協力の下で建国されたが、領土を拡大し統治の確立を進めていくなかで、近代国家への道をとらざるを得なくなり、ワッハーブ主義の原理を貫徹することができなくなり修正ワッハーブ主義へと変化した、と筆者はこの時期を評価している。

第2期は、主にはファイサル国王の時期で、近代化とウラマーの官僚化の時代であったとされる。筆者は、ファイサル国王の目指した「近代化」はイスラーム的伝統を保持しながら、自国民に近代的生活を享受させることを目的としていた、とし、さらにファイサル国王はウラマーが発言できる領域を一部の司法分野と純粋な宗教教育の分野のみに限定し、政治や外交政策の分野に口出しをさせないようにした、と述べている。そして、筆者は、「ウラマーは国家機構に吸収された特殊な官僚となった。サウジアラビアの宗教勢力は牙を抜かれ、穏健化の一途をたどり、体制派ウラマーとしてサウード家の統治の正当性を擁護する体制派宗教勢力となった」とこの時期を評価している。

評者は、この時期には宗教勢力に対する国家の包摂が進み国家によるコントロールが強まったことには同意できるが、宗教勢力が牙を抜かれサウード家の統治の正当性を擁護する体制派宗教勢力となった、との評価は少々説明不足であるように思われる。宗教勢力のなかにはサウード家の統治を冷めた目で見ている者たちもいたのではないかと思われる。1979年には、筆者も述べているように、サウジアラビアの武装したイスラーム過激派によるメッカの聖モスク占拠事件(メッカ事件)が起きている。事件は、宗教勢力が完全に体制派になったわけではないことを示している。また、1990年代以降に表面化したサフワー運動やアル・カーイダにつながるワッハーブ派の動きも、この時期にルーツを持っており、宗教勢力が体制派一色になっていたわけではなかったのではないかと思われる。

第3期については、筆者は、ファハド国王によるイスラーム統治体制の明文化の時代であり、それは外部からの危機、湾岸戦争を契機としてもたらされた。民衆からの保守・革新の主張が盛んになり、国内混乱の時期でもあった、と規定している。

第3期を取り扱った第4章のなかでは、湾岸戦争後の請願書運動、それに対する政府の宗教勢力への対応、請願書運動の分裂、そしてアル・カーイダ系勢力などの過激派の台頭について手際よくまとめられている。

第4章では、筆者は、湾岸戦争を契機としたイスラーム系勢力の動きと政府の対応について詳しく述べており、湾岸戦争後のサウジアラビアの改革運動などを理解するうえで有益である。筆者が独自に収集し分析したと思われる情報も盛り込まれており、サウジアラビア現代史研究の上でも重要である。

最後の第4期については、第5章と第6章のなかで述べられている。そこでは、2011年に起きた9.11同時多発テロ以降の時代について詳しく述べられており、第4章と同様に筆者が独自に収集し分析したと思われる情報が多く盛り込まれており貴重な史料ともなっている。しかし、この第4期については、この時期に起きた出来事について詳細に書かれているため、国王・王家とイスラーム・ワッハーブ派との関係の全体的な流れが見えづらくなっている。まとめ方・記載方法に一工夫あってもよかったのではないだろうかと思われる。

なお、最初の時期区分のところでは、アブドッラー国王によって斬新な改革が進められ、改革を支えるイスラーム法解釈の時期に入ったともいえるとされるが、サウジアラビアにおけるイスラーム法の適用をめぐる問題についても、もう少し詳しい検討が行われてもよかったように思われる。

(福田 安志 早稲田大学イスラーム地域研究機構上級研究員・教授)

**小松久男『激動の中のイスラーム——中央アジア近現代史』(イスラームを知る 18) 山川出版社
2014年 122頁**

本書はNIHU(人間文化研究機構)プログラム・イスラーム地域研究の成果の一環として発刊されたブックレット「イスラームを知る」シリーズの第18番目のものである。19世紀帝政ロシアの中央アジア征服により、中央アジアの政治的実権は中央アジアの人々自身の手を離れて、ロシアという異教徒の帝国に掌握された。さらに約半世紀を経て、中央アジアはロシア革命の波及によりソヴィエト体制に組み込まれ、無神論イデオロギーを奉ずる社会主義のもとで近代を迎えた。そしてソ連解体と中央アジア諸国の独立という時代を画する近年の出来事により、中央アジアは国際社会に開かれると同時に、内からのイスラーム復興とグローバル・イスラームの双方の波にさらされるようになった。タイトルにある「激動」とは、中央アジアのイスラームに大きな変容をもたらしたこれら一連の体制転換の流れを指している。従って、本書の主たる対象は、ロシア・ソ連による統治、社会主義という歴史的経験をもつ中央アジア地域、現在の国名で言えば、ウズベキスタン、カザフスタン、クルグズスタン(キルギス)、タジキスタン、トルクメニスタンの領域である。実際の記述はおおむね南部定住民地域を中心に、これらの地域の近現代史をイスラームの観点から概観することが本書の目的である。

冒頭の「激動の幕開け」および「中央アジア史の概観」と題する二つの節を導入として、全体構成としては次に示す章が続く。(章タイトルの後の丸カッコ内に、章の内の小見出しを順に示し、各々をスラッシュで区切ってある。)

第1章 ロシア統治下のイスラーム

(ロシアの中のムスリム地域／征服と服従／ロシア統治への不敬の兆候／アンディジャン蜂起／イスラームへのまなざし／殉教者か、愚か者か／ジャディード運動の展開／トルクメニスタン自治の構想)

第2章 ソ連時代のイスラーム

(ロシア二月革命から自治宣言へ／ソヴィエト政権とイスラーム／イスラームに対する抑圧／大祖国戦争と宗務局／ソ連時代のイスラーム)

第3章 イスラームの覚醒と再生

(革新派の出現／ヒンドゥスターニーの反論／再生するイスラーム／新独立国家のイスラーム)

第4章 イスラームの政治化と過激化

(イスラーム復興党の試み／ウズベキスタンの動向／タジキスタン内戦(1992～97年)／ウズベキスタン・イスラーム運動／グローバル化する運動)